

研究概要報告書【音楽振興部門】

(1/5)

研究題目	大澤壽人作曲作品録音プロジェクト	報告書作成者	生島美紀子
研究従事者	生島美紀子他 8 名		
研究目的	<p>戦前は欧米で、戦後は日本で活躍した作曲家・指揮者、大澤壽人(おおさわ・ひさと、1906-53)の遺品は、2006 年にご長男大澤壽文氏より神戸女学院に寄贈され、「大澤壽人遺作コレクション」と命名された。</p> <p>以来、申請者は若手スタッフ達と共に、総数約 3 万点に及ぶ膨大な資料群を調査し、5 年間に 2 冊の作品目録——『煌きの軌跡Ⅰ大澤壽人作品目録Ⅰ』(2007 年 12 月)、『煌きの軌跡Ⅱ 神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」詳細目録Ⅰ』(2011 年 8 月)——を編纂した。後者は、自筆楽譜に関するデータと新たに作成された「作品年譜」や「演奏会一覧」などの資料集から成り、大澤の創作・指揮活動の全貌を明らかにした基礎文献となった。作品はこれまで約 70 しか知られていなかったが、多様なジャンルに広がって総数約 970 に及ぶ。第二次世界大戦前後の時代にありながら、これほどの業績を挙げていた作曲家に、今、改めて評価が求められているのである。</p> <p>申請者は目録編纂の一方で「大澤資料プロジェクト」を立ち上げ、作品紹介の演奏会「スペクタクル」主催を続けており、2009 年以来開催した 3 回シリーズ「スペクタクルⅠ・Ⅱ・Ⅲ」は、毎回新聞各紙に取り上げられるなどの好評を得ている。</p> <p>本研究「大澤壽人作曲作品録音プロジェクト」は、こうした背景にある大澤の存在と音楽を、「より広く」世に伝えることを目的とする。</p> <p>上記の演奏会を通じて紹介できた作品はごく一部で、優れた作品の数々が未だ楽譜のまま眠っている。殊に、留学期(ボストン 1930-34、パリ 1934-35)に創作された演奏会用作品には、当時最先端の作曲技法が極めて洗練されたかたちで用いられている。ボストンで才能が開き、驚異的な成長を遂げた大澤は、留学期だけでも総譜 1,000 枚を超える量を創作した。そのいずれの作品も、現在に通じる質の高さを誇っている。今から 80 年以上も前に、20 歳代後半の若さで既に、日本と西洋が交差する大胆且つ繊細な作品世界を築き上げた天才作曲家がいたのである。</p> <p>こうした大澤の作品世界の広がりについて、5 年間で誰よりも知ることになった申請者は、没後 60 年に近い現在、私たちが実際に聴くことのできる作品が少ない状況を残念に思った。藤本賢市氏と片山杜秀氏によって明るみに出た大澤は、片山氏監修の CD リリースによって一躍名を馳せたが、大澤の作品の多くは沈黙の世界に留まったままなのである。1930 年当時の世界楽壇ボストン・パリで活躍した大澤が生み出した音楽は、私たち日本人が自国の誇るレパートリーとして、後世に伝えるべき豊かさを持っている。この豊かさを多くの人に知ってもらうために、作品の普及を今、より積極的に試みたいと考えた次第である。</p> <p>本研究は、留学期から帰国後間もない時期の作品を中心に、大澤の主要な作曲作品を選んで録音し、制作した CD を指揮者・演奏家・各種演奏団体などに送付するプロジェクトである。これによって、大澤の存在がより広く認識されて日本洋楽史に刻まれると同時に、大澤の作品群が演奏家たちのレパートリーに定着し、次の世代に引き継がれる——以上の 2 点を、研究目的として強く願うものである。</p>		

研究内容

大澤壽人(おおさわ・ひさと、1906-53)は、作曲作品約 565 と編曲作品約 403、総数約 968 の作品を遺している。本研究「大澤壽人作曲作品録音プロジェクト」は、2 冊の作品目録編纂の過程で、大澤の作品世界の豊さを深く認識した申請者が、その多彩な拡がりや世に伝えようとする実践的試みである。

プロジェクト実現に関しては、かねてより大澤に理解を寄せる指揮者、岩村力氏の監修を頂いている。兵庫県立芸術文化センター レジデント・コンダクターである氏は、大澤の音楽普及のために作品を新録音し、制作した CD を日本のプロフェッショナルな音楽家たちに送ることを提案された。まずは、優れた作品でありながら音源のないものを選び、プロフェッショナルたちに公開して、大澤作品の存在を知らせようという案である。新録音に際しては、岩村氏と申請者で作品を選択した後、演奏者や録音プロデューサーの人選から録音会場の選定に至るまで、氏のご推薦を頂いた。

演奏者は五十音順に、安藤史子氏(フルート:いずみシンフォニエット大阪メンバー)、梅田朋子氏(ピアノ:桐朋学園大学演奏員)、平井香氏(ソプラノ:二期会)、深澤功氏(コントラバス:九州交響楽団首席コントラバス奏者)、別所ユウキ氏(ピアノ)、松浦奈々氏(ヴァイオリン:日本センチュリー交響楽団アシスタントコンサートミストレス)、松川峰子氏(ピアノ:神戸女学院大学非常勤講師)を予定している。

録音プロデューサーは小貝俊一氏(洗足学園音楽大学非常勤講師)に依頼の上、2012 年 12 月 11 日・12 日の両日、響きの良いことで知られる岐阜市サラマンカホールにて行う。現在、録音を予定している作品は、作曲年代順に以下である。クオリティの高い CD を制作し、充実したライナーノートを添えたい。

- 1.《Night Monologue》(1933 年)松浦+梅田【ヴァイオリン独奏とピアノ、ボストン大学同級生コーエンに献呈】
- 2.《ソナチネ ホ短調》(1933 年)別所【ピアノ独奏、このジャンルにおける大作】
- 3.《小デッサン集》(1934 年)松川【ピアノ独奏、無調への試みがなされた初の作品】
- 4.《Monologue》(1934 年)深澤+梅田【コントラバス独奏とピアノ、原曲はクーセヴィツキに献呈された《コントラバス協奏曲》第 2 楽章】
- 5.《Chanty》平井+松川【作曲年代 1933-34 年と推定される作詩者不明の英語歌曲、内面を描く近代詩】
- 6.《Nocturne》平井+別所【作曲年代 1933-34 年と推定される作詩者不明の英語歌曲、内面を描く近代詩】
- 7.《空の幻想》(1933 年)平井+梅田+安藤【ケンプの詩による英語歌曲、アンサンブル的にピアノとフルートが活躍】
- 8.《桜に寄す》(1935 年)平井+梅田【大澤の編詩による日本語歌曲、パリ初演で大成功をおさめる】
- 9.《秋の歌》(1936 年)平井+梅田+松浦【ヴェルレーヌの有名な詩による仏語歌曲、ヴァイオリン助奏を含む】
- 10.《走馬燈》(1936 年)平井+梅田【一柳信二の詩による日本語歌曲】
- 11.《ロンディーノ》(1936 年)平井+梅田【立居寛の詩による日本語歌曲】

研究のポイント	<p>大澤の作品を収録した CD は現在 7 枚リリースされており、《小交響曲》《交響曲第二番》《交響曲第三番 建国》《ピアノ協奏曲第二番》《ピアノ協奏曲第三番 神風》《トランペット協奏曲 ピアノ伴奏版》《ピアノ三重奏曲》《ピアノ五重奏曲》《ソナチネ》《丁丑春三題》を聴くことができる。しかし、これを大澤が遺した「約 970 作品」という全体量と比較すれば、私たちが耳にできる作品は約 1/100 に留まるのである。</p> <p>本研究のポイントは、大澤の作曲家としての力量をプロフェッショナルな音楽家たちに認識してもらい、オーケストラ大作から独奏曲や歌曲まで、大澤の優れた作品が定期演奏会やリサイタルで取り上げられるように、CD によるデモンストレーションを行う。</p> <p>これにより、プロフェッショナルたちが大澤の作品を積極的に取り上げ、より多くの聴衆が大澤の音楽に親しむ機会が増す。西洋の作曲技法を完璧に身につけ、戦前～戦中～戦後を通して、筆を折ることなく「魂の音楽」を書き続けた世界的レベルの作曲家を知る経験は、私たちに「自国の作曲家」への誇りを呼び起こすだろう。</p>
研究結果	<p>録音は 2012 年 12 月 11 日・12 日に集中的に行う。録音日がこの時期になったのは、多忙なアーティスト 8 名のスケジュール調整によるものである。また、日程を出来る限り短くして、会場費や録音料を抑えるという経済的な目的もあった。</p> <p>「研究結果」は、岩村力氏推薦のアーティストたちの顔ぶれから、新録音によって制作される CD のクオリティの高さに、その成果がみられることになる。申請者も、論文に値する「ライナーノート」を執筆する予定である。</p> <p>これらによって、この度の「デモンストレーション CD」が、大澤の音楽普及のために大きな力を発揮すると期待される。</p>
今後の課題	<p>大澤の音楽普及のためには、上記のような CD 制作の継続が有効と思われる。すなわち、繰り返し新録音を試み、大澤の作品を聴くことのできる環境を徐々に整えてゆく事である。また、聴衆の数は会場の座席数に限定されるが、〈スペクタクル〉のような「ステージにおける生演奏」によって、作品の素晴らしさを直に伝えるという場も必要であろう。</p> <p>こうした「演奏」を主とする試みがさらなる反響を呼べば、2010 年に貴財団カワイ出版から『大澤壽人ピアノ曲集』を刊行して頂いたように、「楽譜出版」という次なるステップも視野に入ってくるであろう。作品が海外コンクールにおいて演奏されるためには、「出版譜であること」という条件をクリアする必要があり、この条件を満たすことができたなら、戦前既に欧米で高い評価を受けていた大澤の作品が、海外で再評価を受ける可能性も考えられるだろう。</p> <p>いずれにせよ、まずは大澤の「日本洋楽史」における存在の大きさが認識され、自国が誇る作曲家として音楽の教科書に記載され、作品が日本人演奏家のレパートリーに定着する日がくるまで、さまざまな普及活動が求められている。</p>

申請者が、2011年5月にカワイサウンド技術・音楽振興財団より助成を頂いた以後に、大澤の音楽普及のために携わった活動は以下で、資料として添付する。

① 『煌きの軌跡Ⅱ－神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」詳細目録－』編纂(2011年8月)

5年をかけて行った3万点に及ぶ資料調査の集大成。

創作と演奏活動を5種類の資料「略年譜・作品年譜・演奏会と公演・放送・ABCホームソング集」として作成し、巻末に収録した。本研究の基礎となる詳細な文献の完成である。

② 神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」による〈大澤壽人スペクタクルⅢ〉主催:2012年3月3日(土)19時、ザ・フェニックスホール

大澤の知られざる作品を紹介するシリーズ演奏会の3回目。

〈スペクタクル〉開催に際しては、「レクチャー付きコンサート」のかたちをとり、演奏に先だて、まず大澤の生涯と作品についての解説を行っている。「大澤壽人遺作コレクション」からの写真をスクリーンに映しながらの紹介は、聴衆へのアンケートで好評を得た。また、プログラムは18頁にわたるA4判冊子を作成し、「プログラムノート」として研究論文を載せ、聴衆の大澤理解への一助としている。

今回取り上げた作品は、世界初演と復活演奏の他に、毎回演奏を続けている《桜に寄す》(1935年)を含んでいる。大澤の音楽ジャンルにおける代表作としてだけでなく、日本が誇る歌曲レパートリーとして後世に伝えたい作品だからである。本研究においても、大澤自身の編曲による《桜に寄す ピアノ伴奏版》を新録音する予定である。

第Ⅰ部: 映画「夜の女たち」より 主題歌シャンソン《夢の花》(1948年)、《ABC ホームソング集》より〈木の下ワルツ〉〈母の愛〉(1952-53年)、《富士山》(1935年)世界初演、《小デッサン集》復活演奏、《ソナチネ ホ短調》(1933年)、《桜に寄す》(1935年)

第Ⅱ部: 《丁丑春三題》(1937年)、組詩曲《便り》(1942年)復活演奏、その他

③ NHK「名曲アルバム」における《桜に寄す》(1935年)放映への協力:2012年4月末から5月

上記のように、《桜に寄す》は大澤が29歳のときにパリで作曲したオーケストラ伴奏による歌曲である。演奏時間約5分の小品ながら、私たちになじみの古謡《さくら》自由に引用され、西洋と日本が交差する独自の世界が素晴らしいオーケストレーションによって展開されてゆく。

申請者は、自筆譜コピーの提供から作品に関する説明や撮影に至るまで、NHKに全面的に協力し、オーケストラ伴奏版原曲による放映に至った。番組がより多くの視聴者の目にとまり、本研究と相まって、「大澤壽人」を知る人が増えることを願っている。